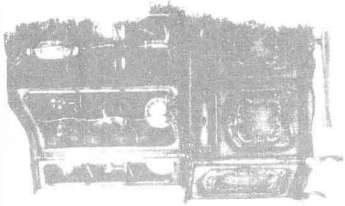
VON DER HOCHZEIT ZU KANA

森瑤子 YOKO MORI

カナの結婚



カナの結婚　結婚カナ

ON DER HOCHZEIT ZU KANA

カナの結婚（けっこん）

一九八六年一月二五日　第一刷発行

定　価　八五〇円

著　者　森瑤子（もりようこ）

装丁者　亀海昌次

発行者　堀内末男

発行所　株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇

郵便番号　一〇一

電話　出版部（〇三）二二三八―二八四二
販売部（〇三）二二三〇―六一七一
製作課（〇三）二二三八―二九六四

印刷所　凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。

©1986 Y.MORI, Printed in Japan　ISBN4-08-772550-2 C0093

カナの結婚

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

食卓は果実や野菜に充たされ
マリアは人々と共に喜んでいた。
そして、己れの涙腺の滴が、この葡萄酒によって
血となっていたことを悟らなかった。

――リルケ『マリアの生涯』「カナの婚礼」より（高橋英夫訳）

男は女の中で、彼女を舞い上らせようとしきりに駆りたてる。次のシーンでは、カナは男にまたがり、ロディオのカウボーイのように有頂天に笑いながら、白い喉をのけぞらせている。

もはや嫌悪のあまり身を縮めたり、恥じて眉をひそめるカナはいない。そればかりか巧みに腰を動かして、自分自身と相手に快感をさずけ始めてさえいた。

どうしたってぶざまになりがちなこの種の運動を、信じがたいほど優雅にやってのけるそのことに、もうこれは現実ではないのだという思いが、チラと過ぎらなかったわけではなかった。

しかもいくら激しく動き、どれだけ興奮しても、どこか水中での動作のように、滑らかではあるがもどかしい緩慢さがつきまとっていたのだ。

更にうさんくさいことには、もうすぐそこまでそれがきているのだという、非常に差し迫った喜ばしい予感が、下腹の奥に熱感となって滲み始めていたこと。うっすらと汗を浮べ、もうひとゆすり躰をあおりたてると、それは突如として温水のように湧き上り、溢れ、迸りでたのであった。

その瞬間視界が鮮やかに真赫に染ったので、その時初めて、それまでの情景が黒から白に至るモノトーンであったことに気づき、ではこれはやはり現実ではなく夢なのだと悟ったその直後に、カナは眼覚めた。躰の中心に温い脈動のなごりがあった。未知と郷愁とが混然となった奇妙な感覚——。生れて初めて、彼女は、夢の中でオーガズムを得た。口の中が乾き、舌が上顎に張りついてしまっていた。

相手役を演じた男は、見知らぬ人間だった。外国映画で一、二度見かけた貧相な脇役者に似ていた。歯並びが悪く、始終地面に唾を吐き出していた男だ。カナは胃のあたりを押さえて、軽い吐き気に耐えなければならなかった。

夫は常に少しだけ早すぎるタイミングでカナの中に入ってくる。そしてできるかぎり長く中にとどまることにのみ、心を砕いているように思われる。カナのためだと言うのだろうが、悲しくも筋違いな努力だった。

彼が自分の中に侵入してくると、カナの中で何かが閉じてしまい、あとはひたすら耐えるしかない。彼の始まりが彼女の終了というふうなのだ。夫の男らしさ――スタミナや持続力などは、そのまま妻の苦痛だった。

腰を使いながら――残念ながら、夢の中の醜男の脇役ほど巧みでも優雅でもなかった――夫は時々薄く眼を開けて探るようにカナの顔を見おろす。彼女はきつく眼を閉じて夢に続くこの朝の光景をいっさいしめだしていたのだが、夫の視線が自分の顔の上を這いまわるのを――まるで黒蠅のように――はっきりと感じることができる。

どうしたの、感じないのか。そう言われるのが辛くて、いかにも感じているかのようなふりをしなければならなかった。

「気持がいいだろう」夫は何度も執拗にその質問をはさみこんで、確証をとろうとする。

「ええ、とっても」とカナは無感動な声で答え、すぐにもう一度少し感情をこめて言い足す。「とってもいいわ」

あの夢の記憶は時間とともにその鮮やかさを増していくようだわ。きっと肉体の中心に、快楽の烙印がくっきりと押されてしまったのではないか。もう消すことのできない印が。加速度的に快感が高まっていった。ほら、ビートルズのヘイ・ジュードのララ、ララ、ララ、ララと音階が無限に上昇していくあの感じ。あとはもう狂乱。昇りつめたところは、とても森閑としていたけれど。そして安らかでなんという慰めに満ちていたことか。あの

貧相で薄汚い見知らぬ小男が、それをあたしにさずけたんだわ。どうせ夢ならウォーレン・ビーティーが相手だったらよかったのに。そこでカナは小さく溜息をつく。

いつからこんなふうに変ってきてしまったのだろう。いつから、たとえば三階までを風のように駈け昇るかわりに、中年女のようにエレベーターを利用するようになったのだろう。

あの長ったらしいコンクリートの階段を一気に駈け上り、その一日がどれだけ不在に満ちて待ち遠しく、しかも苦痛に過ぎていったかを、言葉ではなく激しい息使いで相手に伝え、そのまま彼の腕の中へ欲望にまかせて倒れこんだ日々が、かつてはあったのだ。

彼は彼女の情熱と、重みと、肉体の熱さと、荒々しい呼吸とに圧倒されて、二人はもつれあいながら一番身近にあるものの上へと崩れ落ちていった。

それは青いビロードの肘かけ椅子であったり、何人か主を替えてきた中古のマレンコのソファだったりした。あるいはしばしばカーペットの上であったり。秋の枯れ草色のカーペットはお尻や背中をちくちくと刺した。

時には、たまたま彼が運よく寝室でカナの襲撃を受けて、そのままセミダブルの柔らかい筏の上へ、弾みながら倒れこんだ。そしてごくまれに、バスルームの黒いひんやりとしたタイルの床だったりした。窮屈で冷たくて、手も足もおかしな具合に折れ曲り、あたしは強姦される案山子みたいだと、笑いが止まらなかった。彼は初めのうちは面白がってい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

たけれど、こちらがあんまり笑って涙まで流すので、終りにはすっかり白けてしまったみたいだった。それでバスルームでは二度とやらないぞ、と言ったんだっけ。要するに、時と場所を選ばず、どちらからともなく相手の首に両手を巻きつけて、性愛にもつれこんだ結婚のごく初期の頃の話。あの日々はどこへ行ってしまったのだろう。

「一日中このことだけしか、カナは考えていなかったんだろう」

「そうよ、そうなのよ、気が狂いそうだったわ、一日があまりにも長いんですもの、もう少しで、階段の途中で、あたしいってしまうかと思った」ヘイ・ジュード。ララ、ララ、ララ。

あえぎながら、階段を駈け昇ってきたためにまだドキドキ打っている心臓を、カナは夫の胸にぴたりと押しつける。心臓だけでなく、下腹も太腿も蛭のように貼りつける。

「腹が空いて死にそうなんだぞ」ひどくもどかしげに彼女のスカートをたくし上げながら、彼が不平を言う。少しも不平には聞こえない愛撫のように響く声で。

「あらそう。じゃあたしを食べて」欲望に掠れた声で彼女は命令する。

「僕の妻は淫乱だ」と夫は喜ばしげにうめいて、カナを食べ始める。

現在でも彼は彼女を淫乱だと思っているのだろうか。少なくともそのような言葉を喜ばしげにうめかなくなったことだけは確かだ。ある夜など、酔って「おまえの本性は、死んだ魚のように冷たい」と、呟いたのを耳にしたことがある。とても低く言ったので、かえ

ってすべての音節がはっきりと聞こえるといった喋りかただった。酒のためにしどけなく弛緩している肉体の中で、眼だけが固い怒りに満ちていた。「酔っているのね」とカナは感情を閉じこめた声で言った。すると夫の眼の中から固さと怒りが溶け、彼はニヤリと笑った。あの時のあの言葉は、あてずっぽうだったのか。あるいはもしかして、つい零れ出た真実の感想だったのか。ぽろりととり零したその観測に、妻がぎくりとしたことを、彼は思い至ったろうか。けれども何も話しあわなかった。結局何ひとつとして——。

いつも部屋のどの位置からも、小さく東京タワーが見えていた。相手の躰を抱きしめ、あらゆる箇所を探り、触れ、唇を這わせ、歯を軽くたてている間ずっと、視界の隅に豆電球をちりばめたタワーがたえずチラチラと点滅していたのだった。

まるである種の精巧な玩具ででもあるかのように、お互いの躰をいじくりまわすのはなんと心躍る体験であったろう。

嘗めたり、匂いを嗅いだり、味をみたり、くすぐったり、時には爪をたてたり、かぎりなく愛しむこともあれば、荒々しく乱暴に恥かしめたり——あのめくるめくような過程。

その過程に身をつらね、揉みしだかれ、溶け出していくものの予感にどれだけ打ち震えたことか。

熟練していないからこそ、その不器用さが逆に甘美に感じられるような特別な手順によって、肉体は開花するかのように思われた。

それは憑かれたように豊かで、カナはその儀式が永遠に続いてくれることを願わずにはいられなかった。なぜならば、その憑かれたような快い感覚こそは、性行為そのものよりはるかに豊かで、ずっと激しかったからだ。――では学習と熟練が、つまずきの原因なのだろうか。

それよりも、言葉こそが重要だったのではないか。こちらの思いなり要求なりを、言葉に託すことを怠ったために、そのタイミングを決定的に失してしまったために、カナの性愛は永久に不毛なのだ。そしてカナの夫もまた、不毛なのだ。

でもどうして、口に出してああだとか、こうだとか、ああしてくれとか、こうしてちょうだいとか言うことができるのかしら。愛しあってさえいれば、口で言わなくてもお互いにわかりあって当然なのに、とカナは思う。

だが、彼女の夫がこの二年間の夜ごとの性的な体験を通してさえも、ほとんど何ひとつ彼女の肉体を識りえていない、ということは真に驚きだった。そして多分同じ深い失望を、彼もまた彼女に対して抱いているのは、ほとんど疑問の余地のないことと思われた。

それでも時々今でも、もしかしたら彼がひたすら突き進む彼女の奥深い襞の陰に、何かがひそんでいるか埋もれているかして、それがやがていつの日か、不意に掘り起されるか

もしれないと、期待することもあった。
子宮に感じる鈍い衝撃と痛みとが、いつ突然に快楽のノックに変らないとも限らない。
この夏の休日の朝、夫はいっそう激しく彼女の上で躰を揺り動かす。汗が全身をおおっている。筋肉のひとすじひとすじが濡れて輝いている。
そのように肉体を酷使してカナを励まし、カナのために今や息たえだえになっている夫に対して、彼女はある種の感動と大いなる哀れみを感じないわけにはいかない。
しかしたとえ千年、彼が彼女を突き続けてもやっぱり何も起りはしないだろうと、カナは知っている。それで急に悲しみを覚えて、彼女は彼の背中に両手をまわして、しっかりと自分の胸へと引き寄せるのだった。可哀そうなひと、可哀そうなあたし。あの夢の男は、ひと突きごとにあたしに快感をさずけていったのに。そしてあの夢の中のあたしは、全身全霊でそれを受け入れていた。
いやそうではない。受け入れるというよりは、奪ったのだ。あれを奪いとったのだ。吸いついて、躰中の穴という穴から貪欲に吸収したのだ。そんな感じだった。
その瞬間、カナは自分の問題が見えたような気がした。今あたしが辛うじて開いているのは、膣だけだ。その他のあらゆる穴——目も耳も口も鼻も毛穴も膀胱も肛門も、膣以外のすべての出口（あるいは入口）はきつく閉じている。それもがちがちに閉じているのだ。入れまいとして、出すまいとして。何を？　ああそれにしても何を？　そしてなぜ？　マ

マ、助けて、あなたのせいなんだわ。きっと。

カナはその最後の内部の意外な叫びを、手の甲で押し殺すと、汚いものであるかのように、口を乱暴にこする。

だが思いは口にではなく頭の中にあるので、彼女は夫の下で抵抗するように上体を固くする。あたしは他人に自分を与えることができない。なぜなら二十四歳で結婚するまで、誰からも何ひとつとして与えられなかった。ママはあたしの上に恐ろしい鉄骨のようにそそりたち、あたしを完璧に支配してきたが、一度として愛してはくれなかった。

あたしは愛というものがどんなもので、どんな色で、どんな形をし、どんなに温いものであるかをほとんど知らないから、知らないものをどうして人に分け与えられようか。与えられていないのだから、もっていない。従って自分のもたないものを、どうして他人に与えられようか。

それならばせめて人が——夫が——あたしにくれるもの——愛、肉体——を受け入れることはできないものか。あれだけママの愛に飢えた年月を送ったのだから、それが喉から手が出るくらい欲しかったのだから、今こそこうして差し出されているのだから、遠慮などせず、さっさと取ったらいいじゃないか。

それなのに、カナは受け取れない。受け取ったことがないものを、どう受け取ればよいのかわからない。だから、カナは閉じる。固く閉じて自分の殻に閉じこもる。すべての穴

をがちがちにしめつけて縮こまる。
カナは自分のことを生け贄のように感じだす。夜ごと夫の前に肉体を差し出し、自分が突き刺され、抉られ、切り裂かれるような気がしていた。
この苦痛から逃れる方法がひとつだけあった。彼を一刻でも早く舞い上らせてしまうこと。それしかない。
そこで彼女は眉間に快楽を装った深い皺を刻んで、激しく腰を使う。輪を描くように回転させながら、同時に上下に揺さぶり、さも悩ましげなうめき声をたて続けにもらしながら、相手をあおりたてる。演技は上々、おおむね二年近い熟練のたまものだった。
そしてカナはその朝見たのだ。彼がついに昇りつめて、こらえきれず上体を弓のように反らせたまさにその瞬間、その両の眼がいかにも悲しげに彼女の視線を捉えたのを――。
それは、あのような絶頂にありながら、いかなる情欲の光りをも宿してはおらず、ひたすら悲しみのために澄み渡る二つの暗黒の宇宙を思わせた。やがて瞼が下りてきて、宇宙はかき消えた。
彼は力つきて彼女の上に崩れ落ちる。カナは、気味の悪いほど脈打っている夫の心臓の下で、もしかして彼は知っているのではないかと、ちらと考えた。あたしがあれの演技をしてきたことに、彼は気づいているのかもしれない、と。あのすごいほど澄み渡った悲しげな瞳がその証拠ではないか、と。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb